大きなけやきの木の下で　絵本のはなしをしましょうよ。

2023 年 12 月のはじめごろ　こまばようちえん

みなさま、こんにちは！

あっという間に、一年最後の月になってしまいました。昼の長さも冬至（12 月 22 日）に向かってどんどん短くなっていきます。そして地面にのびる影もすーっと長くなってきました。私の町の花屋さんの店頭にはクリスマスリースやポインセチア、そして松飾りが仲良く並んでいます。

慌ただしい年の暮れですが、暖かな部屋で、まったりと絵本を読みたくなる季節でもありますね。

では、大きなけやきの木の下で、絵本のはなしをいたしましょう。

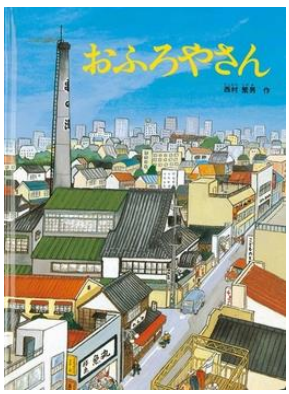
① たんぽぽ組・年少組のみなさんに。

●『ぼくなにをたべてたか　わかる？』
みやにしたつや・作絵（すずき出版）2010 年/1210 円

ゴリラさんの顔のアップ。なんだかほっぺたがふくらんでいます。もぐもぐもぐ、なにを食べているのか、わかるかな？　手がかりは、食べる音とお皿の上に残っているもの。あむあむあむ。しゃりしゃりしゃり。ぷちゅぷちゅ。どれもおいしくて、ニコニコ笑顔のゴリラさんですが、最後に、ものすごい顔に！私も食べたくなーい。さて、ゴリラさん、一体なにを食べたのかな。（須藤）

●『ぎょうざがいなくなりさがしています』
玉田美知子・作絵（講談社）2023 年/1650 円

「ほんじつ　おおばまち　にらやまのぎょうざがいなくなりさがしています。とくちょうは　ひだが 5 つあるひとくちサイズのやきぎょうざです。」という放送が町に流れます。放送を聞いて、としお君は、ぎょうざがどうしているかを考えます。水餃子とけんかして、いなくなったのかな。新幹線に乗って餃子の故郷に帰ったのかな・・などなど、としお君の妄想は止まりません。絵も面白くて、ラストに大笑い。私はこの絵本を初めて読んだ日の夕食は焼き餃子にしました。ちなみに、ひだの数は４つ。（須藤）



●『おふろやさん』〈こどものとも傑作集〉
西村繁男 作(福音館書店)　1983 年/990 円

町のおふろやさん=銭湯(せんとう)に行かれたことはありますか？(今は銭湯自体が少なくなっているかもしれませんね)。「銭湯を“感じる”絵本」の登場です。あっちゃん(３歳くらいの女の子)が家族そろって銭湯にでかける最初のページ以降は、絵が物語ります。お父さんと男湯へ入るあっちゃん。小さな木戸(懐かしい！)に靴をしまったら、洗い場で体を洗って大きな湯舟へ。周りの人たちのなんと魅力的なこと。あっちゃんには常連のお風呂友だちがいたり、やんちゃな小学生 3 人組(水着の日焼け跡がナイス)が羽目を外してお年寄りに叱られたり、高齢のお父さんを介助する息子がいたり、背中に刺青している人も(！)お風呂だからもちろん、みーんなスッポンポンなのだけれど、いやらしさとは無縁なので

ご安心を(これぞ作者の力量)。「古き良き日本」なんてまとめてしまうのはちょっとさびしい気がします。絵を指さしながら、こちらの心もポカポカ、会話が楽しく弾むことでしょう。(近藤)

右は「瑞雲社・2017 年復刊版」

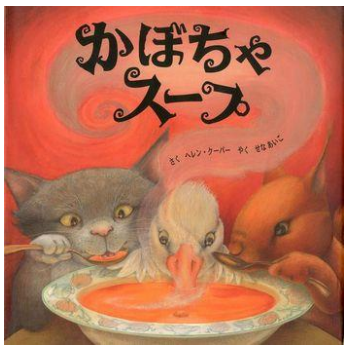
●『あっ　おちてくる　ふってくる』
ジーン・ジオン 文　マーガレット・ブロイ・グレアム 絵 まさきるりこ 訳
(あすなろ書房)2005 年/1430 円 ※重版未定

わたしたちの世界に存在する「おちてくるもの」と「ふってくるもの」を、易しいことばで詩情豊かに謳います。花瓶に活けた花の花びら、雨、木の葉、りんごにドングリ、雪…。そして１日の終わりには「影」も静かにおりてきて、長く長く伸び…やがて夜の帳(とばり)がおりると、星がふってきます。さて、夜にトミーの家でおちるものはなんでしょうね？そして翌朝、お父さんに抱き上げられたトミーが…おちる？！ でも、大丈夫。お父さんがしっかりとうけとめてくれますからね。今も子どもたちに愛される名作絵本『どろんこハリー』など多くの絵本を世に出してきた名コンビのデビュー作(コルデコット・オナー賞受賞)。静かな美しさをまとった絵本です。(近藤)
＊現在は、『ほら　なにもかも　おちてくる』と改題されて瑞雲舎から復刊されています。

② **年中・年長組のみなさんに。**

●『ぼくはびっくりマーク』
エイミー・クラウス・ローゼンタール・作　トム・リヒテンヘルド・絵
大友剛・訳　(ひさかたチャイルド) 2023 年/1650 円/

表紙にびっくりマークが描かれています。この絵本の主人公です。作者の発想にびっくりしてしまいました。「ぼく」は、「みんなとちょっとちがう」という気持ちを抱えています。みんなと同じになろうと頑張ってみたけれど、ダメでした。しょんぼり……。あきらめかけた時、「ぼく」は「かわった子」（はてなマーク）に出会って、自分の持っている力に気付かされます。そして、「どうどうと、まっすぐたつんだ。そう、ぼくはびっくりマーク! 」と宣言するのです。そう、みんなとおなじじゃなくていい。なんだか、私まで元気をもらいました。（須藤）



●『かぼちゃスープ』
ヘレン・クーパー・作　せなあいこ・訳（アスラン書房）2002年/1.760円

世界一おいしいかぼちゃスープは、ネコがカボチャを切りわけ、リスがかき混ぜ、アヒルが塩で味付けをしてこしらえます。スープを飲んだら、演奏会!　それが、３匹のルールなのですが、ある日、アヒルが、「ぼくがスープをかきまぜる！」とわがままを言い始めたものだから、大騒ぎ。とうとうアヒルは家を出て行ってしまいます。ネコとリスはだんだん心配になってきて、探し回ります。わがままさんには困っちゃうけど、いないと寂しくて、会えるとまた嬉しくなっちゃう。お話を読み終わった後、改めて表紙を見ると、ほっこりしてしまいます。（須藤）

●『てぶくろがいっぱい』

フローレンス・スロボドキン 文 ルイス・スロボドキン 絵　三原 泉 訳
(偕成社)2008 年/1320 円
手袋や靴下の片方って、どうしてなくなるのでしょうね。昔からの謎(←わたしだけ？)。
ネッドとドニーは赤い手袋を持っている双子です。ある日、ドニーが赤い手袋の片方を失くしてしまいました。それを知った近所の人たち(郵便屋さんや牛乳屋さんまで)が、見つけた手袋を次々とドニーたちの家に届けてくれるので、家のタンスの引き出しは赤い手袋でいっぱいに！そこでネッドが考えついたのが、集まった赤い手袋を裏庭に吊るすこと。こんな張り紙をつけて…「あかいてぶくろを　なくしたひとへ。うちのうらにわをのぞいてみてください。」…さぁ、それからどうなったのかは、どうぞ一緒に読んでお楽しみくださいね。
善意の連鎖と思いやりに支えられる楽しいおはなし。あたたかい気持ちに満たされる素敵な読後感が味わえます。(近藤)

●『クリスマスのまえのよる』
クレメント・C・ムーア 詩 R・デュボアザン 絵　こみや ゆう 訳(主婦の友社)
2011 年/1650 円

クリスマスにピッタリの絵本。サンタクロースといえば…「８頭のトナカイがひくソリに乗ってやってくる。プレゼントの入った袋をしょって、煙突から入ってくる陽気なおじいさん」…そのイメージの元になったと言われる詩を書いたのは、アメリカの神学者で詩人のクレメント・クラーク・ムーア。その詩に、ロジャー・デュボアザンが絵を描きました。いかにも愛嬌ある、白いおひげのおじいさんが、出っぱったおなかで煙突から入るその姿にニコニコする子どもたちも多いです。読みやすく洗練された訳は、埋もれている英語圏の名作を発掘することに定評のある小宮由さん。読むほどに、クリスマス気分が高まって

くることでしょう。ワタクシゴトですが、３歳になった孫への今年のクリスマスプレゼントのひとつは、この絵本です♪(R・デュボアザンの大ファンの近藤)

③ 大人のみなさんに

●『家をせおって歩く　かんぜん版』

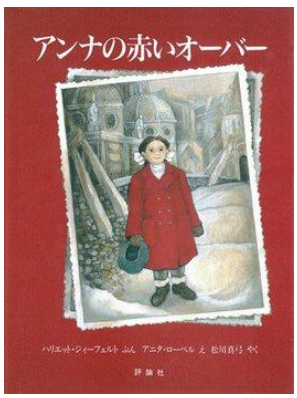
村上慧・作（福音館書店)1540 円/2019 年

※2016 年３月に月刊「たくさんのふしぎ」として刊行した作品を改訂、増補しました。

　まず、扉の写真にのけぞりました！家の下から足が出ていて、道路の隅に立っている写真。「2014 年６月 26 日いわて県大船渡市にて」、と書かれていました。村上さんは、発泡スチロールで家を作り、それを背負って（被って、かな？）いろんな町に出かけていきます。「家の紹介」「持ち物紹介」「土地を探す」「間取り図を描く」など、詳細に説明されているので、読んでいるうちに、「これもありかも。面白い」という気持ちになってきます。「間取り図を描く」というのは、自分を家とともに置かせてくれる人が見つかったら、そこを「寝室」として、近所にお風呂（風呂屋)、トイレ（たとえば公園)、キッチン（コンビニ）などを決めることです。なんて自由な発想なんでしょう。村上慧さんは 1988 年生まれ。武蔵野芸術大学造形学部建築学科を卒業して、現在アーティストとして活躍されています。（須藤）

●かこさとし◆しゃかいの本『こどものとうひょう　おとなのせんきょ』
かこさとし 作（復刊ドットコム）　2016 年(初版は 1983 年)/1760 円

この本は、最も大切な「民主主義の真髄」をとりもどしたいという願いでかいたものです。「民主主義のヌケガラ」と後世から笑われないために、私たち自身が反省したいと思っています。←作者かこさとしさんのあとがきより抜粋。 満１８歳に選挙権が引き下げられた年に復刊された名著です。『からすのぱんやさん』『だるまちゃん』シリーズの作者として、かこさとしさんをご存じの方も多いことでしょう。
児童館前の小さなひろばをめぐって、子どもたちが大騒ぎの一大事。野球をしたい・サッカーやドッジボールをしたい・おにごっこや陣取りをしたい・・時を同じくして大人たちの選挙が行われていたので、自分たちも「投票」でひろばの使い方を決めよう！ということになるのですが……。子ども自身が自分事としてひきよせやすい具体的な題材で考えさせ、「選挙」「民主主義」の本質とその重要性を伝えます。民主主義が抱えるあやうさや、選挙と政治の関係にまで(選挙権のない子どもを大事にしないことなど)、触れていてすごい。
初版はなんと４０年前。色あせるどころかいっそうの輝きをもって読み継がれるにふさわしい本だと思います。子育て中の一家に１冊あると、とても心強いんじゃないかなぁ。
少し大きくなった我が子から、「選挙ってなあに？民主主義ってなあに？」と訊かれても、よし来たどんとこい！ですよ。(近藤)



（こちらの２冊も似たような雰囲気のお話です）

●『アンナの赤いオーバー』
ハリエット・ジィーフェルト 文　アニタ・ローベル 絵　松川 真弓 訳（評論社）
1990 年/1430 円

ひらいてすぐの扉絵に、ハッとします。戦争直後の廃墟と化した街並み。うっすらと雪の積もった窓辺に立つ母娘(割れた窓は板や布で補強されている)。お母さんの表情はどことなく沈んでいます。お父さんは戦死してしまったのでしょうか。
お母さんは愛する娘アンナのために、素敵なオーバーを新調することにしました。お金が

ないので家じゅうの貴重品を集めてお金代わりに。まず、オーバーの材料となる一番たいせつな羊の毛は、たっぷりの冬毛が刈れる春まで待って…金時計と引き換えに。その羊毛を毛糸に紡いでもらうのはランプと引き換えに、という具合。赤い色がいい！というアンナの希望通り、お母さんとアンナがせっせとコケモモを摘んで毛糸を赤く染めたら、機屋(はたや)さんで生地にしてもらい、最後は仕立て屋さんが素敵なオーバーに縫いあげてくれました。赤いオーバーが最高に似合っているアンナ！よかったね。クリスマスイブにはお世話になった仕立て屋さんたちをご招待。ツリー前のパーティーの、なんて楽しそうなことでしょう。もしかしたら、アンナと赤いオーバーは、戦後すぐの大人たちにとって、希望の光そのものだったのかもしれません。実話に基づいた物語。

・似た雰囲気をまといつつ、それぞれの楽しさが味わえる『もぐらとずぼん/福音館書店』『ペレのあたらしいふく/福音館書店』もオススメです♪(近藤)

・絵本はざっくりと次のように対象年齢にそって紹介していきます。ただ対象年齢はあくまで目安です。お子さんが興味を示した絵本、お子さんに読んであげたいなと思った絵本を見つけたら、手にとってみてください。

① たんぽぽ組・年少組のみなさんに②年中・年長組のみなさんに③大人のみなさんに

・「重版未定」の絵本も積極的に取り上げます。図書館に入っていますし、出版社にリクエストが多くなると復刊される可能性もあります。

・紹介した絵本は重版未定(中古品)も含めて藤井チズ子前理事長からいただいた寄附金で極力購入し、本の部屋に入れます。藤色のテープが目印です。